

KALS NEWSLETTER 54

2016年12月
九州アメリカ文学会
事務局 佐賀大学全学教育機構内
佐賀市本庄町1
〒840-8502

マドリードの白い光

高野泰志（九州大学）

メトロの階段を登った途端、もう夜だというのにフライパンの底にいるのかと錯覚するような猛烈な熱気にくるまれた。数日前まで滞在していたパンプローナはむしろ肌寒いくらいだったのに。

ちょうど『日はまた昇る』の主人公たちの足跡を追って、パリから始めた旅は、終着点のマドリードに到達していた。ここで調べたかったのは、ヒロインのブレットが闘牛士に捨てられ、取り残されるホテル・モンタナからパラス・ホテルのバー、そして言わずと知れた名店ボティンまでの足取りである。作品ではわずか6ページほどだろうか。

翌日、マドリードの北、グランビアの近くにあるホテルを出て、ホテル・モンタナを目指す。ホテル・モンタナは二流、三流の安宿として描かれており、特にモデルがあったわけではない。しかし作中の地名を地図で追うと、おおよその場所が特定できるはずである。ジェイクの乗ったタクシーはプエルト・デル・ソル（太陽の門という意味の広場）を通り過ぎ、サン・ヘロニモ通りに入ったところで止まる。サン・ヘロニモ通りに向かうと、スペインらしいゴシック様式の巨大なビルが隙間もなく並んでいるが、そこには確かに安っぽいホテルがいくつか看板を出している。

「店はみな、日よけを下ろして熱を締め出そうとしていた。通りの日の当たる側の窓は錠戸が降りている。タクシーが縁石につけて停まった。2階にホテル・モンタナの看板が見える」マドリードの熱気が伝わってくる描写だが、現在通り沿いにはこの暑さをもとめせずに、サングラスや観光客用の土産を路上で売り歩く商人がひしめいている。風呂敷に商品を固定して、風呂敷の四隅に通した紐を片手で握りしめているのは、おそらくそういう商売が違法であり、取り締まりがあると紐を引っ張るだけですべての商品を持って逃亡できるからだだろう。

行ってみてわかったが、それほど長くないサン・ヘロニモ通りでホテルなどの商業施設が入っているのは全長の半分だけであり、ホテル・モンタナがあるとされている場所は2ブロックほどに限定される。ジェイクがタクシーを降りたのはおおよそのあたりだろうか

と想像を巡らせながら、次の目的地のパラス・ホテルに向かう。ジェイクとブレットはタクシーで向かうのだが、サン・ヘロニモ通りの反対の端に位置している。歩いて5分もかからないだろう。現在はウェスティン・パラスとなっているが、建物は当時のままである。

このあたりは少し道も広く、日を遮る建物がないために、まともに太陽の光があたり、あらゆるものを白く染め上げている。湿気がないために、建物の影を出るとまるで叩きつけるかのような鋭い日光が肌を焼くのを感じる。パリでブレットはジェイクに、「道を渡るのにも歩こうとしない」と揶揄されるが、マドリードのこの熱気では歩きたくもないだろう。ただ日陰に入ると一気に涼しくなるのが心地よい。

ヘミングウェイはマドリードではパラス・ホテルを頻繁に利用していた。コルテス広場を渡ったところにヘミングウェイのお気に入りのプラド美術館があり、そこへの行き帰りに便利だったのだ。早速ホテルに入り、奥まったところにあるバーに向かう。作品ではジェイクとブレットは3杯ずつマティーニを飲む。当時と現在とでどれほど物価の差があるのかわからないが、マティーニは1杯が並の食堂で十分食事が取れくらいの値段である。だがそこで飲んだマティーニはたしかに絶品だった。ジェイクは「オリーブを入れてくれ」とバーテンに注文をつけるが、私の頼んだマティーニには最初からオリーブが入っていた。

ブレットはカクテルを楽しみながらも、すぐに別れたばかりのペドロ・ロメロのことに話を戻してしまう。「その話はしないんじゃないのか?」「どうしようもないのよ」「大切なことは話してしまうと失くしてしまうものだ」「肝心のところは話してないもの」これはパリの部屋で眠れない夜を過ごすジェイクの描写の反復になっている。ジェイクは他のことを考えようとしながら、すぐに別れたばかりのブレットのことや自分の失われた性器のことにどうしても思いを巡らせてしまう。ふたりの関係はどうにもならないにも関わらず。

ジェイクはその後、バーを出てタクシーでボティンに向かう。ボティンは18世紀から続くスペイン最古のレストラン（スペイン人は世界最古のレストランと呼ぶ）であり、ヨーロッパでもっとも有名なレストランのひとつであろう。予約をしていなかったものの、少し早目の時間であったせいか、幸い席は空いていた。ジェイクらが食事をするのは2階であるが、当時ボティンの2階で食事ができたのはオーナーの知人に限られており、ヘミングウェイは特別に計らってもらっていつも2階で食事をしてきたようである。現在では2階は特別料金が必要となっており、料金さえ支払えば誰でも食事ができる。

「わたしたちはボティンの2階で昼食をとった。世界で最高のレストランのひとつである。わたしたちは子豚のローストとリオッハ・アルタを頼んだ」この「子豚のロースト」は、実際にヘミングウェイのお気に入りであり、ボティンではいつもこれを注文していたようである。現在でももっとも人気のあるメニューであり、もちろんわたしもこれを注文する。4種類ほどの前菜を食べ、リオッハ・アルタを飲みながら子豚を待つ。やがてテーブルの横にウェイターが大きな皿に乗せた子豚を持ってきて、その場で切り分け、サーブしてくれる。スペインの食事は非常に量が多いのはわかっていたつもりだが、それにしてもかなりの量である。ジェイクらは「たっぷりと食事を食べ」3本ものワインを飲んだと描かれているが、わたしにはとてもそれだけの量は入らない。

「酔っ払わないで、ジェイク」ブレットが言った。「あなたにはそんな必要ないんだから」「なんで分かるんだ?」「やめて」彼女は言った。「あなたは大丈夫よ」「酔っばらおうとし

てるんじゃない」わたしは言った。「ちょっとワインを飲んでるだけだ。ワインが好きなんだ」「酔っ払わないで」彼女は言った。「ねえジェイク、酔っ払わないで」

ジェイクの語りでは、ロメロのことが頭に取り付いて離れず、苦しんでいるように描かれているのはブレットだったが、まるでヤケになったように食事を頬張り、ワインを流し込む姿からは、ジェイクもまた苦しんでいることが徐々に明らかになってくる。まるで喪失感を埋めようとするかのように食べ、飲み続けるジェイクであるが、いくら流し込んでも満たされることはない。むしろ満腹感が増せば増すほど、喪失感が募るという皮肉な状況が描かれている。ボティンはそのどうにもならないふたりの関係が、相変わらずどうにもならないままもとの袋小路に戻ってくることを浮かび上がらせる転換点に位置するのである。

ボティンを出たジェイクとブレットは近くの広場でタクシーに乗り、グランビアに向かう。その車中が物語の終わりになっている。「ひどく暑く、明るく、家並みは目に刺さるような白さだった」同じような炎天下の中、満腹で少し重い腹を抱え、やっと作品を追う旅も終わったかと思いながらマドリードの街を歩いていると、語られなかった「肝心のところ」を少しだけ覗き込んだような気がしてくる。とはいえ舞台を歩いたに過ぎず、それはおそらく思い込みでしかないのだろうが、そう考えるのも愉快ではないだろうか。

地区便り

<熊本地区>

熊本大学 池田志郎

前回報告以降の熊本アメリカ文学研究会の活動をご報告いたします。熊本地震の影響でしばらく活動ができませんでしたが、日常を取り戻すためにもと、9月に活動を再開しました。自宅の全壊など被害が大きい会員もいらっしゃいますが、文学の世界に浸ることで、少しばかりの時間でも辛い現実を忘れることで、生活再建の活力になればと願っています。

○133回（2016年9月17日）熊本大学にて

題 目： ラフカディオ・ハーン：五高着任後の熊本発第一信書簡（Nov.20, '91）、及びその後の彼の熊本観を中心に

発表者： 角田 俊治 （熊本大学非常勤講師）

司会者： 池田 志郎 （熊本大学）

*ハーンの熊本時代を中心として、移り変わる熊本と日本の姿についての発表でした。ハーンの熊本嫌いの理由、当時の写真などを利用しての歴史上のエピソードについての話題、夏目漱石とのかかわりなど、多岐にわたりました。参加者からの意見も多く出て、

活発な研究会になりました。また、熊本地震との関連でも感慨深いものがありました。

○134回（2016年10月29日）熊本大学にて

題目： ファム・ファタールに投影される語りの孤独
——*Breakfast at Tiffany's*と「トニー滝谷」の比較

発表者： 濱田 比呂美（熊本大学非常勤講師）

司会者： 馬渡 美幸（熊本大学非常勤講師）

*T.カポーティと村上春樹の作品を取り上げ、両作品にみられる「ファム・ファタール」と「孤独」をキーワードにした発表でした。なぜ村上春樹はノーベル文学賞を取れないのかという話題でも大いに盛り上がりましたが、「ファム・ファタール VS.母親」という視点や語り手“T”についての考察など、とても参考になりました。

大災害を目の当たりにすると人間の無力を感じますが、それを乗り越えられるのが人間でもあります。辛い時には脳内を楽しい思いで満たし、現実から一瞬でも逃避できることが、その後の力の源になるのではないのでしょうか。人間は感情に支配される動物です。希望がないと生きていけません。文学は生きる希望を与えてくれます。

“After all, tomorrow is another day.”

<鹿児島地区>

鹿児島大学 千代田夏夫

南国の秋も長けてゆきます。千葉義也先生（鹿児島大学名誉教授）は本年度も『ヘミングウェイ研究』第17号（日本ヘミングウェイ協会、2016）に「書誌：日本におけるヘミングウェイ研究----2015」を寄稿されています。森孝晴先生（鹿児島国際大学）が会長を務められる日本ジャック・ロンドン協会は6月18日に名古屋にて第24回年次大会を開催、森先生は議事運営などに専念され、鹿児島国際大学大学院後期課程生のチャン・チンリンさんとチャン・サンサンさんが京都大学大学院の学生さんと共に研究発表をなさいました。なおこの大会時に『ジャック・ロンドン研究』第3号が披露されましたが、収録された7本の論文・翻訳等のうち5本が鹿児島在住の5人の研究者の方々によるものとのことです。森先生は5月以降、ご論文「ジャック・ロンドンと椋鳩十——新資料を読む」やロンドンに影響を与えた長沢鼎に関する3回のご講演をこなされています。岡山で開かれた全国大会ではフィッツジェラルドについての研究発表が実に3本、大いに満喫いたしました。来年はいよいよ鹿児島大学、皆様のご協力を心よりお願い申し上げます。

沖縄地区会員の平成 28 年の研究活動の中から、報告のあったものを紹介します。まず、琉球大学の小林正臣さんは、本年度より、科研費による研究課題「バートルビーたち：『オフィス・フィクション』の諸相」に取り組んでいます。ホワイトカラーのオフィス・ワーカーの元型をメルヴィルの「バートルビー」に見出し、そのような人物が以後のアメリカ文学の作品においてどのように再創造されてきたのかを探る研究で、バートルビー像への既存の解釈に依存しない、新たな展開が期待されます。同じく科研費による研究では、喜納も本年度から琉球大学の同僚 4 名と「アメリカ型グローバリズム」に関する研究を開始しました。その手始めとして、今年 5 月にハワイ大学で開催された NAISA (Native American and Indigenous Studies Association) のラウンドテーブルセッション“Imagining the (Trans-)Indigenous Pacific”で研究発表を行い、各地の先住民研究者と学術交流をする機会を得ました。学会発表としてはこの他にも、6 月に東京女子大学で開催されたアメリカ学会年次大会で、琉球大学の加瀬保子さんが自由論題として、“The Perfect Guest: Trauma and the Implicated Subject in *A Gesture Life* by Chang-rae Lee” を発表しました。同大会では、琉球大学の山城新さんも、松永京子氏（神戸市外国語大学）による企画部会 B「拡張主義と環境」において招待発表者として発表しました。山城さんは、5 月には香港大学で行われた国際シンポジウム“Contextualizing Asian Ecocinema: Past and Future”でも招待発表をしており、環境文学の分野で国内外を問わず活躍しています。会員の出版活動としては、同じく山城さんがアティーナ・プレス（東京）から今年出版された *The Panama-Pacific International Exposition--San Francisco, 1915* の Part 1:『公式記録』全 5 巻および来年刊行予定の Part 2:『日本政府刊行資料』全 2 巻それぞれで別冊解説を担当しています。この他にも、6 月に刊行された *American Quarterly* の第 68 巻 2 号には喜納の multiple book review が掲載され、今年 7 月に発行されたアメリカ学会の英文ジャーナル *The Japanese Journal of American Studies* の第 27 巻（2016）には、加瀬さんの研究論文“Diasporic War Memory in Juliet S. Kono’s *Anshū: Dark Sorrow*”とともに喜納の研究論文“Postwar US Presence in Okinawa and Border Imagination: Stories of Eiki Matayoshi and Tami Sakiyama”がそれぞれ掲載されました。ちなみに加瀬さんは来月米国フィラデルフィアで開催される MLA で、スペシャルセッション“Alternative Memories of the Asian Pacific War: Transnational Kinship and Friendship”のオーガナイザーも務める予定です。今後とも互いに切磋琢磨しながら、さらなる成果を沖縄から発信していきたいものです。

事務局からのお知らせ

(1) 九州アメリカ文学賞応募

『九州アメリカ文学』57号にありますように、九州アメリカ文学賞（新人賞）の応募締め切りは2017年2月20日(月)です。応募をお待ちしています。

従来は郵便による応募に限定していましたが、前年より電子メールによる応募も可能となりました。

(i) 郵送の場合

〒840 - 8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内
九州アメリカ文学会事務局 鈴木繁 宛

(ii) 電子メールの場合

高橋美知子（福岡大学）mtakaha@fukuoka-u.ac.jp
いずれの場合も、「九州アメリカ文学賞論文応募」と明記して下さい。

(2) 『九州アメリカ文学』投稿

『九州アメリカ文学』57号にありますように、『九州アメリカ文学』への投稿は2017年4月30日（日）締め切りです。こちらも応募をお待ちしています。

宛先は

〒840 - 8502 佐賀市本庄町1 佐賀大学全学教育機構内
九州アメリカ文学会事務局 鈴木繁 宛

(3) 「九州アメリカ文学会出版助成金」申請

2017年度「九州アメリカ文学会出版助成金」への申請締め切りは、2017年2月28日（火）です。申請の要領は、『九州アメリカ文学』57号を参照下さい。

(4) 九州アメリカ文学会第63回大会発表者募集

九州アメリカ文学会第63回大会は、2017年5月13日(土)・14日(日)の両日、佐賀大学本庄キャンパスにおいて開催されます。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募ください。多くの研究者の積極的なご参加をお願いいたします。

1. 発表者は大学院博士前期課程（修士課程）在学者を含むアメリカ文学研究者。
2. 発表時間は40分（発表30分、質疑応答10分）。
3. 発表は英語でも日本語でも可。
4. 発表希望者はタイトルとレジュメを以下の要領で提出すること。
 - * レジュメは発表の際に使用する言語で作成すること。
 - * 英文の場合は300語程度。
 - * 日本文の場合800字程度とし、数行の英語の要旨または数語のキーワードを文末に付加すること。
 - * 発表題目の固有名詞（作家名・作品名）は英語とする。

- * コンピューターで作成する場合は、Wordを使用し、メールで添付書類として送付するか、ワープロソフト名が明記されたフロッピーディスクに原稿を添えて郵送すること。
- * 提出先 メール tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp
郵送先 〒811-1123 福岡市早良区内野7-11-6 高橋 勤
- * 締め切りは2017年2月20日（月）（必着）。
- * 大会ならびに発表に関するお問い合わせは、高橋 勤（tel.092-803-2217/ e-mail: tsutomu@flc.kyushu-u.ac.jp）までお願いします。実りある大会にするために、多くの応募を期待いたします。

(5) 『アメリカ文学研究』, *The Journal of the American Literature Society of Japan* 論文投稿

日本アメリカ文学会発行の『アメリカ文学研究』(和文、英文)への論文投稿希望の方は、直接、本部事務局へ論文を送付してください。原稿送付先住所、締め切り等、詳細は必ず本部のホームページにてご確認ください。

(6) 日本アメリカ文学会第56回全国大会発表者募集

2017年10月開催の日本アメリカ文学会第56回全国大会(10月14日(土)・15日(日)、鹿児島大学)で発表を希望される方は、名前、住所、略歴、現在の所属、発表のレジュメを事務局のメールアドレス(suzukis@cc.saga-u.ac.jp)に3月31日(金)までに電子メールで応募してください。

以下の点に特に気をつけてください。

- (i) 略歴では、連絡用のメールアドレス、6~7月にかけてゲラを送送する宛先の住所(郵便番号)、現在の所属(常勤か非常勤か)を必ず明記する。
 - (ii) 発表タイトルに副題をつける場合は、和文は「—」、英文は「:」に統一する。
 - (iii) 発表レジュメの字数は日本語で1200字程度、英文で400語程度。
- 例年会員に送られる年賀状にその詳細が記載されるので、発表予定の方は必ず参照する。

(7) 会計からのお知らせ

大学等の所属に変更がございましたら、年会費振込用紙にその旨をお書きいただくか、あるいは、KALS 会計(名本達也 : namotot@cc.saga-u.ac.jp)までメールにてお知らせください。どうぞよろしく願いいたします。

●KALS 会員用メーリングリストへのご登録のお願い●

2016 年 5 月の九州アメリカ文学会総会での承認を受け、会員向けのメーリングリスト（以下 ML）を運用することになりました。災害や列車運休などによる大会・例会の急な変更、また各種学会・文学イベントのお知らせなどで活用したいと考えております。ご登録いただいたメールアドレスについては事務局で管理いたします（ただし 2016 年 3 月までは例会担当との共同管理）。近い将来、当メーリングリストを利用して、ニューズレターや例会案内等をメールでの PDF 配布に切り替えることを予定しております。ご登録の手順は大変簡単なものとなっております。この機会にぜひご登録をお願いいたします。

【登録に関する詳細】

ML への参加方法：ML 管理者（KALS 事務局）の承認が必要。

ML 投稿設定：登録メンバーのみ投稿可、それ以外の投稿は管理者の承認が必要。

【登録の手順】

1. 以下のメールアドレスに空メールをお送り下さい。送信時のメールアドレスが ML に登録されます：join-kalsjapan1955.dIPx@ml.freeml.com
2. 【Freeml】より「ML 参加確認のお知らせ」というメールが届きますので、メール内のリンク先（「参加完了はこちらから」）にアクセスし、メッセージ欄にお名前とご所属を記入の上、「参加承認申請する」のボタンをクリックして下さい。
3. 一週間以内に ML 管理者（KALS 事務局）による承認が行われ、その旨メールが届きます。このメールが届くと登録完了です。一週間以内に承認のメールが届かない場合はお手数ですが、下條（例会担当）までご連絡下さい：shimojo@flc.kyushu-u.ac.jp
4. 登録された方は ML のアドレス宛（下に記載しております）にメールを投稿することができます。投稿されたメールは ML に登録されている会員の方々に送信されます。ML のメールアドレスは以下の通りです：kalsjapan1955@freeml.com

以上